

調整班研究報告

調整班研究A01「原典」

「原典」調整班研究報告

池田 知久

東京大学大学院人文社会系研究科教授

1999年度（平成11年度）の研究活動

古典諸学の中において、「原典」研究は最も基礎の位置を占めている。その意味で、本領域研究「古典学の再構築」の中でも本調整班研究A01「原典」の研究が極めて重要であることは改めて言うまでもない。

「原典」班の現状は、計画研究5件19名、公募研究6件9名、代表研究者と分担研究者を合わせると、合計11件28名の研究者が参加している。

そして、「原典」班の「原典」班としての研究目的は、それを構成する各計画研究・各公募研究の中で具体的に行われる研究の諸目的を全体的にカバーする総括的な目的となるのであろうが、当初に設定した目的は以下のとおりである。

第1に、「原典」をとりまく状況（写本か刊本か、テキストの伝播・流布の形態、テキストの保存状態、テキストの調査・研究・校訂の進捗状況、新しいテキストの発見の有無・多寡等々）はそれぞれの文明（分野）によってまちまちであるが、各文明における「原典」の状況を調査・把握しその結果を報告して広く研究者等に知らせることである。そして、以上の研究活動の中で、それらの類似性共通性と相異性を全体的、文明横断的に明らかにすることである。なお、本「原典」班に欠けている分野（西洋・朝鮮等）については内外より専門家を招聘して意見を聞く必要がある（この点は以下も同じ）。

第2に、来たる21世紀の古典学を展望するために、最近半世紀間に相当に進展した各文明（中国、日本、南インド・タミル、チベット、チャガタイ・トルコ、ペルシア）における古典学、特に「原典」の校訂・注解・翻訳・

研究・方法論等々を各分野の中で総括する（すなわち、古典学の各分野の研究状況の実態把握（国内・国外）を行う）と同時に、古典学全体に対しても諸分野の研究の相互交流・相互理解を通じて大局的な総括を行い、以上の総括の中から新たな古典学の方向を見出していく。

また、古典学の研究成果をオープンにして国民に還元し、後継の研究者人口を増やす等の目的から、主要な「原典」の分かりやすく親しみやすい日本語訳を作る方向を模索する。

第3に、古典が現代に至るまで伝承されてきた形態である口承と書写（抄写）について、各文明（分野）の内部におけるその種類・特徴・意義等の研究を進めるとともに、その研究成果の上に立って「原典」形成（口承・抄写等）の実際の姿を文明横断的に考察しながら、一般的な「原典」形成（伝承を含む）の理論の確立を目指したい。以上の3点は、いずれも定期的な研究会議を開いて追求する研究目的である。

第4に、各計画研究・公募研究が諸「原典」の内外における写本・版本の所在を実地に調査・確認し、必要なコピーや電子テキストを購入しマイクロフィルムに撮り、またデジタルカメラ・スキャナー・コンピューターによるデータベース化等を行って、各テキストの比較検討、批判的校訂、系統づけ等の作業を進めるが、「原典」班としては共同で利用する電子機器を購入してそれらの作業をこの方面から督励する。また、インド・チベット等では、現代に至るまで研究されることなく民間に伝承されてきた多量の写本が、今まさに滅びようとしているという危機的な状況も存在する。必要かつ可能であれば、それらの保存の方策をも講じたい。

このような研究目的を持つ大型の研究計画は、国内外を通じていまだかつて提起されたことがなく、それ故、本研究計画は成功すれば世界的なレベルから見ても画期的な業績となりうるものである。

以上に記した諸目的を達成するために、「原典」班は、本年度は2回の研究集会を開催した。その主な実際の目的は、「原典」班に参加する研究者が他者の研究を相互に理解することにあった。第1回研究集会は5月に東京

で開催。計画研究者と公募研究者の7名（池田知久・井谷鋼造・五味文彦・関口順・高橋孝信・堀池信夫・松川節）が日本・中国・タミル・イスラム・ヨーロッパ等の各文明（分野）における「原典」の状況、「原典」の研究状況の概略について報告し、それらに関して意見交換を行った。第2回研究集会は11月に京都で開催。計画研究者と公募研究者の5名（池田知久・久保一之・五味文彦・堀池信夫・間野英二）が日本・中国・イスラム等の各文明における「原典」の状況、「原典」の調査・研究結果などについて専門的かつ詳細な報告を行い、それに基づいて出席者全員が討論を行った。なお、「原典」班の研究成果の一端は、各研究者の手で報告書にまとめられ、ニューズレター『古典学の再構築』等に掲載されている。

今回（2000年3月24日・25日）の「文明と古典」は、総括班の差配の下、「原典」班が中心となり他の古典諸学との協力・連携を求めて開催する公開シンポジウムである。内外から裘錫圭教授（中国、北京大学中文系、専攻は古文字学）などの著名な学者を招聘して基調講演・パネルディスカッション・全体討議を行い、「原典」班からは「原典調整班研究報告」（本報告）を始めとして5名が、全体・インド・タミル・日本・イスラム等の各文明（分野）における「原典」の研究について専門的な報告を行い（池田知久・井谷鋼造・尾上陽介・高橋孝信・松田和信）、それに基づいて出席者の間で討論を行うものである。

「原典」の置かれている状況と「原典」の研究状況

20世紀が終わろうとしている今日、諸「原典」の置かれている状況、諸「原典」の研究されている状況は、それらを生んだ文明（分野）の相異によってまちまちであり、すべての「原典」に共通・一致する状況を見出すことは、困難のように思われる。

例えば、日本学においては、写本であれ版本であれ、「原典」資料がよく保存され、従来あまり注目されなかった資料類もよく公開・公開されて、それらの細分化された高度な研究・分析がどの分野でもよく行われている。

中国学においては、非常に早い時代に印刷術が普及したために、写本学の伝統がほとんど存在しなくなるとともに独自の古典学を発達させてきた。中国では、今世紀初頭以来、特に文化大革命収束後、陸続として写本（紙に書かれたもの以外に、竹簡・木簡・帛書等も）が発見され、古典研究の面貌が一変されつつある。

インド学・タミル学やイスラム学では、長い間、書写

されることなく主として口承され、今なおほとんどの古典が写本によって伝えられてきたために、それらの所蔵の実態調査・コピーやマイクロフィルムの蒐集・電子テキスト化などからまず手をつけ、またそれらの校訂本の作成がまず第一に必要とされる。インド等では、研究されることなく民間に伝承されてきた大量の写本が、近年に至るまで研究・保存されることもなく放置され、今まさに滅びつつあるという危機的な状況すら生じている。

チベット学では、文明における主要「原典」の整理（目録・解題・批判的校訂本・翻訳）はすでに行われているが、主要「原典」以外は膨大な資料群の整理が行われておらず、未出版の写本のまま、なお入手不可能となっている。

西洋古典学では、中世以来、ほとんどすべてのテキストに優れた校訂本が作成されているために、古典研究の中に占める「原典」研究の位置は比較的小さい。

また、非西欧文明圏が西欧近代文明から受けた衝撃の表現の一つとしての、西欧の近代古典文献学の受容という問題について見れば、19世紀に確立した西欧の近代古典文献学によって始めて研究が進むようになったインド学・タミル学・チベット学・イスラム学等と、その影響をほとんど被らず伝統的に独自の古典学を発達させてきた日本学・朝鮮学・中国学との相異も、軽視することのできない事象である。

こういうわけで、今日の時点で我々が古典、特に「原典」に向き合いそれを研究しようとする際、まず第一に、個々の文明における古典や「原典」の間に優劣の格差を設けず、それらをすべて同等の価値を有するものとして取り扱う、ある種の文化的相対主義の立場に立つことが必要なのではないかと思う。と言うのは、このような立場に立つことによって始めて、あらゆる研究の出発点である、個々の文明の全体的な体系や構造（およびその歴史的展開）の中における古典あるいは「原典」の位置と意義とがいかなるものであるか、というような内在的な問題も解明の途に着くと考えられるからである。古典や「原典」が本来、属している近代以前に対する研究において、近代以降の産物である西欧中心主義（あるいはその親戚筋に当たる、キリスト教の重視から生まれる偏見、非キリスト教文化に対する無理解や軽視、無意識の内に我々の頭の中に刷りこまれている近代的な諸観念等々）の立場に依然として立つならば、個々の文明における古典・「原典」のあるがままの姿を捉えることに成功することは難しい。

古典諸学の基礎としての「原典」研究の課題

古典諸学の基礎としての「原典」班の研究すべき課題は、本領域研究「古典学の再構築」に掲げたもの以外にも多々あり、はなはだ多いと言わなければならない。以下、当初に設定した目的に即して若干の補足を記しておく。

当初に設定した目的の第1で述べたように、各文明における「原典」の状況を調査・把握しその結果を報告して広く研究者等に知らせる課題があるが、それは一つには、厳密な学術的批判に堪えうる精善のテキストを得るため、あるいは校訂を通じてそのようなテキストを作るためである。また、形成された後のテキストだけでなく、テキストの形成・変容の過程それ自体もまた研究の課題とならなければならない。それぞれの「原典」がいつ、いかなる事情・目的の下に、誰によって成書されたか、一時期の単一の層から成るものかそれとも長期にわたる多層の構成物か、などといった問題は、決して単純な問題ではなく、その「原典」の帰属する文明（分野）の基本的性質に関係するからである。そして、以上のような各文明（分野）の相異性に基づく、「原典」の形成の個別性特殊性を解明することと、同時にそれらを横断した全体像を提起することも、我々の課題となるはずである。

当初に設定した目的の第2で述べたように、各文明における「原典」研究を各文明の中で総括するだけでなく、諸文明における諸「原典」研究の総括を相互につき合わせて、古典学の「原典」研究全体に対しても大局的な総括を行うという課題がある。それは、以上のような総括の中から、来たる21世紀の新たな古典学の方向を見出ししていくためである。

当初に設定した目的の第3で述べたように、古典の伝承形態である口承と書写（抄写）についても、個別の各文明（分野）内部的な、およびそれらを跨いだ文明横断的な考察を進めながら、一般的な「原典」形成の理論の確立を目指すという課題がある。

その際、「原典」の伝承のされ方（口承の期間の長短、口承から書写に移るプロセス、個人作者の創作であるかもしくは集団の作品であるか、素人集団であるかもしくは職業集団であるか、等々の問題）や、さらに「原典」の受容のされ方（読む・聴く受容者が誰であるか、どういう場面においてであるか、その教育や学習の形態、等々の問題）等を、それぞれの古典を生んだ文明の特質との関わりにおいて、知識社会学的に具体的かつ詳細に解明する必要がある。古典にさまざまな種類のテキストがあることは、常に研究者の頭を悩ませる問題であるが、そ

のような諸テキストの形成・変容の様相がどうなっているか、形成・変容を促す原因は何であるか等といった問題は、複数の種類のテキストの存在という目に見える物質との関連だけでなく、その裾野に広く広がっている目に見えない世界、すなわち口承・神話・民間説話等との関連においても研究しなければならない課題であると思われる。

（2000年4月20日，加筆・修正）

バーミヤン渓谷から現れた仏教写本の諸相

松田 和信
佛教大学教授

1 はじめに

今世紀初頭、英国のスタイン、フランスのペリオ、ドイツのグリユンヴェーデル、我が国の大谷探検隊を始めとする各国の探検隊は競って中央アジアへ足を踏み入れ、シルクロードに点在する遺跡を発掘し、様々な言語で書かれた膨大な量の出土文献を持ち帰った。またこれらの探検隊とは別に、英国のパウアー大尉、英国のインド学者ヘルンレ、ロシアのカシュガル駐在総領事ペトロフスキーといった人々も、インドあるいは中央アジア赴任中に土地の人たちが持ち込んだ出土文献を直接あるいは間接に買い集めた。そしてそれらの文献は、その後の仏教研究に大きな影響を与えることになった。発見された資料のほとんどは断簡にすぎなかったが、既に失われたと思われていた数々の重要文献の原典がその姿を現したからである。

ところで、このような中央アジアにおける発見がその後も続いたわけではない。1931年に現在のインド・パキスタン間の国境紛争地帯に位置するギルギットの仏塔跡から発見された約3000葉の樺皮写本（紙写本を一部含む）、いわゆる「ギルギット写本（Gilgit Manuscripts）」を最後に、探検ブームが去り、あるいは世界情勢の変化等により、その後例外的に少数の写本発見の報はあったが、大規模な発見は今後もはや望むべくもないものと思われていた。

しかし、この数年の間に状況は劇的に変化した。旧ソ